
図書室の紅茶

逢哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書室の紅茶

【Nコード】

N4448J

【作者名】

逢哉

【あらすじ】

毎週月曜日に図書室で本を読む。そんな“オレ”がある日出会った年上の“彼女”とお話。

「おもしろい？」

毎週月曜日の放課後は、図書室に行く。

一番隅で詩集を読んでいたところ、一つ上の学年と思われる赤いリボンの先輩？に言われた。

「…暗い詩です。」

「それはね、失恋した作者の切ない想いが描かれてるんだよ。」
描かれてる？

目の前の彼女を見上げた。彼女は優しく微笑む。

「ね、文学少年？」

涼しげな風が吹き、白いカーテンが微かに揺れた。

「オレは理系です。この本、知ってるんですか？」

ほのかに香る、甘い匂い。彼女はくす、と笑う。

「うん。だって図書委員長だもの。」

確かに袖に委員長バッチが光ってる。

こげ茶色の短い髪が風になびいて、綺麗だった。

「ところで少年、紅茶はいかが？」

「…え、は？」

彼女に手を引かれ、カウンターの奥の部屋に入った。

部屋の中は本、と可愛らしい白いテーブルと椅子。

「はい、どうぞ。」

そう言って渡されたのは、紅茶と、クッキーと、一冊の文庫本だった。

その日から、毎週月曜日の放課後は彼女との読書会になりました。

（後書き）

図書室の紅茶を讀んでいただき、誠にありがとうございます。
これからたくさんの小説を書いて行こうと思っています。
是非読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4448j/>

図書室の紅茶

2010年10月15日06時18分発行